アギスとクレオメネスの改革

――スパルタ社会の実像と改革の本質――

加藤　聡一郎

本論文は、借金の帳消しと土地の再分配により市民の平等を実現し、リュクルゴスの国制を回復させることを目指した 3 世紀半ばのスパルタ王、アギスとクレオメネスによる改革に、近年のスパルタ史研究の成果を反映して新たに考察を加え、ヘレニズム期のギリシア世界全体で見られた貧富の格差の対立やそれによる社会改革の運動に関して、新たな視点を提案することを目標とする。

アギスとクレオメネスの改革についての一次史料は、ほぼ唯一プルタルコスによる『アギス伝』と『クレオメネス伝』が遺っているばかりである。それによると、ペロポネソス戦争の勝利によってスパルタ市内に金や銀が流入した結果、富裕層は蓄財に励んで豪奢な生活を送るようになり、質素倹約と財産の平等の「見せかけ」を維持しようとした往時の慣習を捨て去ってしまった[1]。彼らはなりふり構わぬ財産獲得競争に身を投じ、搾取の対象は同じスパルタ市民の中間・貧困層にも及び、その結果 4 世紀を通じて貧富の格差は拡大し続け、5 世紀中ごろから急激な減少傾向にあったスパルタの市民数も、回復の兆しを見出せないでいた。その結果、240 年代にはスパルタの市民数はたったの 700 人にまで減少し、貧富の格差は修復不可能な状態になってしまっていた[2]。このような状況でスパルタ王に即位したアギス 4 世は、市民団の平等と市民数の補充を目指し、借金の帳消しと土地の再分配を試みたが、もう一人のスパルタ王レオニダス 2 世や富裕層らの反対にあい、処刑されてしまう。レオニダスの息子クレオメネス 3 世は、改革反対派を追放して土地の再分配を完遂し、市民数を 4000 人にまで増やすことに成功したが、マケドニアのアンティゴノス・ドソンとの戦い（222 年、セラシアの戦い）に敗れたためエジプトへの亡命を余儀なくされた。

このスパルタにおける改革の要因は、ヘレニズム期のギリシア世界で急速に拡大した貧富の格差に起因すると考えられてきた[3]。Fuks は、全ギリシア的な格差問題と革命の広がりについて扱った。彼によると、370 年代から 2 世紀前半にかけて社会経済的対立と革命がギリシア世界全体で 70 件起きた。彼はそれらの対立と革命の性質を 7 つのタイ

---

[1] スパルタにおいて、市民が持つ財産の平等が実現したことはただの一度もない。貧富の格差を許容する一方、富裕者が自己の豊かさを見せびらかすことを規制し、質素倹約を尊重する文化が 6 世紀末に形成され、市民団の平等という建前が維持されたとするのが、van Wees, H. (2018), “Luxury, Austerity and Equality in Sparta,” in Powell, A. (ed.), *A Companion to Sparta*, 2 vols., Blackwell Companions to the Ancient World, Chichester（以下、Powell, A. (ed.)）, vol. I, pp. 202–235 による最新の研究である。

[2] Plut. *Agis*. 5.

[3] ターン、W. W.（角田有智子・中井義明訳）（1987）、『ヘレニズム文明』、思索社（原著＝Tarn, W. W. (1952), *Hellenistic Civilization*, London, 3rd edition, first published 1927）、101、114–115 頁。

プに分けて検証した。アギスとクレオメネスによる「革命」は既存の政治体制の指導者によってもたらされた革命であり、ペロポネソス全体に波及した革命運動の端緒となった[4]。

アギスとクレオメネスの改革についての個別研究でも、スパルタにおける貧富の格差の実態と、それがアギスとクレオメネスの改革にどのように関係したかという視点から研究が進められてきた。Oliva や Shimron、David らはそれぞれ富裕層の中にも改革賛成派がいたことを明らかにしているが[5]、彼らの研究においても貧富の格差拡大とその対立が改革の直接的な原因であるとされている。また、スパルタ軍の増強が市民数（人口）の減少というギリシア世界全体の社会問題と結びつけられたという見解もある[6]。総じてヘレニズム期ギリシアの社会問題と関連させて考えられてきたアギスとクレオメネスの改革であるが、一方でレウクトラの戦い以降のスパルタの変遷とは切り離されてしまっていた。しかしアギスとクレオメネスの改革がスパルタの社会問題を解決し、ペロポネソスでの覇権を取り戻そうとする試みである以上、レウクトラの戦いの後のスパルタにおける内政・外交の変遷を辿らなければならない。

アギスとクレオメネスの改革の急所は、土地の再分配であった。アギスは 4,500 人にラコニアの中心部の土地を分配して市民数を補充する法案を提出したが、結局はそれを達成することができずに改革は失敗に終わった。クレオメネスはエフォロイを殺害し反対派の市民を追放するという強硬策で土地の再分配を敢行し、4,000 人の市民を創出した。貧富の格差と市民数減少というスパルタの社会問題を一挙に解決する施策である土地の再分配であるが、具体的にどのように行われたのだろうか。まずは、3 世紀半ばのスパルタで土地がどのように所有されていたかについて知る必要がある。

特に注目すべきなのは、プルタルコス『アギス伝』の一節である。

Plut. *Agis*. 5. 4

> スパルティアタイは 700 人以上は残らず、彼らのうちで土地（γῆν）とクレーロス（κλῆρον）を持つ者は 100 人ほどで…

この記述から、3 世紀半ばのスパルタでは、700 人の市民の内 100 人の富裕層が市民権の維持に必要不可欠なクレーロスに加えてその他の土地（γῆ）を持っており、残りの 600

---

[4] Fuks, A. (1974), “Patterns and Types of Social-Economic Revolution in Greece: From the Fourth Century to the Second Century B.C.,” *Ancient Society*, 5, pp. 51–81. また、この論文に先立つ Fuks (1966), “Social Revolution in Greece in the Hellenistic Age,” *La Parola del Passato*, 111, pp. 437–448 も併せて参照のこと。

[5] Oliva, P. (translated by I. Urwin-Lewitová) (1971), *Sparta and Her Social Problems*, Amsterdam and Prague, pp. 220–221; Shimron, B. (1972), *Late Sparta: the Spartan Revolution, 243–146 B.C.*, Buffalo, pp. 14–24; David, E. (1981), *Sparta between Empire and Revolution (404–243 B.C.): Internal Problems and their Impact on Contemporary Greek Consciousness*, New York, pp. 148–158.

[6] Cartledge, P. and A. Spawforth (1989), *Hellenistic and Roman Sparta: A Tale of Two Cities*, London and New York, pp. 42-43.

人はクレーロスのみをもつ貧困層であったということがわかる[7]。つまりスパルタには二種類の土地が存在したということになる。

この二種類の土地には、アリストテレスも言及している。

Arist. *Lak. Pol*. fr. 611. 12 Rose (=Herakleides Lembos 2. 7)

ラケダイモンでは、土地（γῆν）を売ることは恥ずべきことだと見なされ、父祖伝来の土地（ἀρχαίας μοίρας）を売ることは許されていない[8]。

この断片からは、スパルタに γῆ と ἀρχαία μοίρα という二種類の土地が存在していたことが分かる。ではいつごろからスパルタの土地は二種類に分けられるようになったのだろうか。Cartledge はメッセニア戦争以前にスパルタ人貴族がラコニアに所有していた土地が、メッセニア戦争後にメッセニアの土地が全市民に分配されたとき、その新たに分配された土地と区別して ἀρχαία μοίρα と呼ばれるようになったと考えている[9]。しかし、スパルタで土地の売買が禁じられている証拠となるような史料は 5 世紀以前にはなく、むしろスパルタ市民には売買の権利があったことを示す一節がトゥキュディデスにあるため[10]、売却が許されていない ἀρχαία μοίρα はペロポネソス戦争後に現れたと筆者は考える[11]。

371 年のレウクトラの戦いの敗戦後、エパメイノンダスがラコニアに侵入しメッセニアを独立させたことにより、スパルタは領土の半分を失うことになった。ここに至ってスパルタは 1,000 人以下にまで減少した市民数の維持のために、第二次メッセニア戦争後以来の土地所有改革を断行せざるを得なかった。そのために市民がもとから持っていたクレーロスの売買を禁止して市民数の減少を食い止め、所有者がいなくなってしまっていた土地を市民に分配した[12]。前者は ἀρχαία μοίρα、後者は γῆ と呼ばれた。しかし、貧富の格差の拡大にともなって γῆ は富裕層の手に集中し、一部の大土地所有者がスパルタのほとんどの土地を寡占する状況になった。

アギスとクレオメネスの土地の再分配の対象は富裕層のみが所有していた γῆ であったと考えられる。アギスの政敵であったもう一人のスパルタ王レオニダス 2 世は、アギ

---

[7] Fuks, A. (1962), “The Spartan Citizen-Body in Mid-Third Century B.C. and Its Enlargement Proposed by Agis IV,” *Athenaeum*, n.s. 40, pp. 246–249.

[8] 橋場弦・國方栄二訳（2014）、『アリストテレス全集 19　アテナイ人の国制・著作断片集 1』、岩波書店、373 頁。

[9] Cartledge, P. (1979), *Sparta and Laconia: A Regional History, 1300–362 B.C.*, London, p. 168.

[10] Thuc. 5. 34. 2 : ἤδη καὶ ἀρχάς τινας ἔχοντας ἀτίμους ἐποίησαν, ἀτιμίαν δὲ τοιάνδε ὥστε μήτε ἄρχειν μήτε πριαμένους τι ἢ πωλοῦντας κυρίους εἶναι.（訳）捕虜の身分を受け入れた市民兵に対して、市民権の剥奪、政職に就く資格の没収、そして「あらゆるものを買ったり売ったりする権限をなくした」。この τι は動産も不動産も指すと考えられる。

[11] 同じく二種類の土地がアリストテレスの時代に新たに制定されたと考える研究は、Jones, A. H. M. (1967), *Sparta*, Oxford, pp. 40–43.

[12] van Wees (2018), op. cit., p. 205-207 は、レウクトラの戦いの後、市民数の減少を抑えるために市民に土地が分配されたと考える。

スの改革に対し、「（アギスは）貧民たちに富裕者たちの財産を提供」し、「土地（γῆ）の分配と借金の帳消し[13]」を画策していると長老会に訴えた。さらに、アギスの時は最後まで実行できなかった土地の再分配がクレオメネスの時は迅速に行えたのは、クレオメネスが事前にスパルタの富裕大土地支配者層 80 人を追放したためであった[14]。アギスとクレオメネスの改革によって不利益を被るのはスパルタの大土地所有富裕者層のみであった。

では、受益者は貧困層であったかというと、そうとも言えない。確かに借金の帳消しは貧困層の利益になるものだったが、土地の再分配の対象は 700 人のスパルタ市民に対して 4,500 人であり、ペリオイコイやヒュポメイオネス（市民権を失った元スパルタ市民）、そして外国人傭兵が含まれていた[15]。それ故、貧困層は借金の帳消しが完了した段階でアギスの改革への積極的な支持を打ち切り、無行動な傍観者となった[16]。

アギスとクレオメネスの改革の目的は貧困層の生活を豊かにするものではなく、平等な財産状態の市民を創出することに他ならなかった。では、それが彼らスパルタ王にとってどのような意味があったのか。それを知るために、4 世紀におけるスパルタの政治的な変化、そしてその帰結たるアレウス 1 世による改革の試みについても見ていきたい。

平等な社会を築き上げたと信じられ、自らも「ホモイオイ」を自称したスパルタ人共同体の中にも、富裕なオイコスや、ある役職を特権的に務めるエリート家系は常に存在していた[17]。しかし、古典期にあってはポリスの意思決定における民会の影響力は強く、開戦に関する最終的な決断は民会で行われ、民会から法案に対する修正案も提出されていた[18]。また王も様々な特権が認められていたため、ポリスの主導的な立場に立つことができた[19]。特に、任期が終身であることと、軍の指揮権を持ち軍事的成功を収める機会に恵まれていたことが、国内のイニシアチブを取るうえで王にとって有利な要素であった。一方で強力な王権を抑制するために設立されたエフォロイは着実にその本来の役

---

[13] Plut. *Agis*. 7. 5.

[14] Stewart, D. (2018), “From Leuktra to Nabis, 371–192,” in Powell, A. (ed.), vol. I, p. 393.

[15] Fuks (1962), op. cit., pp. 262–263.

[16] Shimron (1972), op. cit., pp. 14–24. Shimron は貧困層の改革への不賛同の理由を、貧困層が組織化されておらず、また伝統的権威への畏敬の念があったためであるとしている。

[17] Davies, P. (2018), “Equality and Distinction within the Spartiate Community,” in Powell, A. (ed.), vol. II, p. 490–491.

[18] Andrewes, A. (1966), “The Government of Classical Sparta,” in Badian, E. (ed.), *Ancient Society and Institutions: Studies Presented to Victor Ehrenberg on His 75th Birthday*, Oxford, pp.1-20; Jones (1967), op. cit., pp. 20–21; Davies (2018), op. cit., p. 493. *Pace* Cartledge, P. (1987), *Agesilaos and the Crisis of Sparta*, Baltimore, p. 129: ‘the Assembly’s role was ordinarily confined to rubber-stamping the *probouleumata* of the Gerousia placed before it by the presiding Ephor.’

[19] 王が持つ特権については Hdt. 6. 56–58 や Xen. *Lac*. 13. 10–11 を見よ。王が他の役職に比べて政治的に優位な立場に立つ機会に恵まれていたとする研究は、Jones (1967), op. cit., p. 16; Thomas, C. G., (1974), “On the Role of the Spartan Kings,” *Historia*, 23, p. 271; Rahe, P. A. (2016), *The Spartan Regime: Its Character, Origins, and Grand Strategy*, New Haven and London, p. 52. また、Cartledge (1987), op. cit., pp. 205–206; Kennell, N. M. (2010), *Spartans: A New History*, Chichester, p. 99; Millender E. G. (2018), “Kingship: The History, Power and Prerogatives of the Spartans’ ‘Divine’ Dyarchy,” in Powell, A. (ed.), vol II, p. 467 も見よ。

目を果たした。5 世紀を通じてスパルタ軍の最高指揮官としての王に対する規制がいくつか追加され、エフォロイは王に対抗し得る権限を持ち始めた[20]。ペロポネソス戦争期に貧富の格差が拡大すると、富裕層はパトロネジを形成し、長老会とエフォロイを使って政治的な影響力を増し、「代々受け継がれた特別な政治的権力を有する」という意味でのエリート層を形成した。

しかし、3 世紀前半に富裕エリート層を凌ぐ影響力を持つ王が出現する。309 年に即位したアレウス 1 世（以下、「アレウス」）は、272 年にラコニアに侵攻したエペイロス王ピュロスと戦い遂には彼を戦死せしめたため、スパルタ人やペロポネソス諸ポリスからの名望を得て、ペロポネソス同盟を再興してマケドニアと戦えるだけの影響力を持つことができた。その時彼は、富裕エリート層を政治の場から排除し、ヘレニズム風の専制的な王権をスパルタに導入しようと決意したのである[21]。そしてアレウス率いるスパルタはアテナイとプトレマイオス朝エジプトと組んで、267 年からマケドニアのアンティゴノス 2 世を相手にクレモニデス戦争に突入する。しかし、アレウスは 265 年にコリントス近郊でマケドニア軍に敗れ、戦死してしまうのだった。

アレウスがヘレニズム的な単独支配体制の確立を目指した証拠として挙げられるのは、彼自身の名が刻まれた硬貨と碑文である。

アレウスは 267 年－265 年にスパルタで作られた初めての硬貨として、銀のテトラドラクマを造幣した[22]。注目すべきは、もう一人のスパルタ王の存在が完全に無視され、アレウスの名前だけが硬貨に刻まれていること、そしてスパルタの 2 王家の象徴であるディオスクロイを表す 2 つの星ではなく、神話上の王家の始祖であるヘラクレスの図像が使われていることである。これらのことから、ヘレニズム諸王を模範として、エフォロイや同僚の王から何の干渉も受けない単独支配体制を築こうとするアレウスの意図を読み取ることができる[23]。

アレウスの硬貨の流通は限定的で、スパルタ市民に与えた影響は少なかったとする研

---

[20] 6 世紀から 5 世紀を通じて、エフォロイには王を監督する権限が新たに付与された。遠征に出かける王にエフォロイが随行するようになり（Hdt. 9. 76. 3; Xen. *Hell*. 2. 4. 36; *Lac*. 13. 5）、戦果が芳しくない王を審査する権限もエフォロイにあった（Hdt. 6. 82）。4 世紀になると、エフォロイの権限は王を上回るようになった（Xen. *Lac*. 8. 4; Pl. *Leg*. 712d; Arist. *Pol*. 1270b14; Polyb. 23. 11. 4）。結果的にスパルタの王権はエフォロイによって制限された。Millender (2018), op. cit., p. 473.

[21] Cartledge & Spawforth (1989), op. cit., p. 28; Kennell (2010), op. cit., p. 162; Stewart (2018), op. cit., pp. 387–390; Millender (2018), op. cit., p. 473.

[22] 硬貨の写真は、Grunauer-von Hoerschelmann, S. (1978), *Die Münzprägung der Lakedaimonier*, Berlin, Tafel 1, Gruppe I を見よ。

[23] Grunauer-von Hoerschelmann (1978), op. cit., p. 4; Palagia, O. (2006), “Art and Royalty in Sparta of the 3rd Century B.C.,” *Hesperia*, 75, pp. 207–208; Pagkalos, M. E. (2015), “The Coinage of King Areus I Revisited: Uses of the Past in Spartan Coins,” *Graeco-Latina Brunensia*, 20, p. 152. また、アカイア連邦のペロポネソス全体を自らの同盟に組み込もうとする野望に対する政治的なメッセージを読み取ることも可能である。Cavanagh, W. (2018), “An Archaeology of Ancient Sparta with Reference to Laconia and Messenia,” in Powell, A. (ed.), p. 83.

究者もいる[24]。一方で、Pagkalos は、アレウスの硬貨がスパルタ国内で実際に流通していたと考えている[25]。さらに筆者は、アレウスが自身のヘレニズム的な専制君主としての姿を最もアピールしたかった相手は、スパルタの富裕エリート層であると考える。彼らはアレウスの時代以前から国際的な貨幣経済の中に生きており、アレウスの硬貨も必然的に目にしただろう。そこに刻まれていたアレウスの名とヘラクレスの横顔が何を表すかも、彼らには一目瞭然だったはずである。アレウスは、自らがスパルタの政治や外交を掌握し、ヘレニズム諸王と渡り合うというメッセージを硬貨に刻ませたのである。

アレウスの名前が刻まれている碑文は 3 つある。1 つ目は、クレモニデス戦争に先立ってスパルタとアテナイの間で結ばれた同盟条約が刻まれた碑文である（*IG* II^3 1. 912）。この碑文には、アレウス個人の名前が 5 回現れる（26、29、40、50、55 行目）。最初の 3 箇所では、現状のスパルタの同盟国を指す時に、わざわざ「ラケダイモン人とアレウスの」同盟国という書き方がされている。50 行目では、アテナイ人から選出された 2 人の委員が協議する相手として、アレウスのみが名指しされており、55 行目では、顕彰の対象が「エフォロイとアレウス」となっている。全体を通して当時のエウリュポン家の王エウダミダス 2 世は無視され、エフォロイの存在感も薄い。スパルタの外交におけるアレウスの影響力がエフォロイや同僚の王（エウダミダス 2 世）を大きく凌いでいることが分かる[26]。

2 つ目の碑文は、オリュンピアのヘライオンで発見された 2 つの断片から成る碑文である（*IVO* 308, *Syll*^{3}. 433）。この碑文は柱の台座部分に刻まれたものであり、その上にはアレウスの像が立っていたとされている。このアレウス像は、マケドニアと対立関係にあったエジプトのプトレマイオス 2 世がプロパガンダのために建てたものだと考えられている[27]。同時に、これはアレウス自身の外交上のスタンスの表れでもある。彼は全ギリシアの自由のための戦いの主導者としてヘレニズム諸王とも対等な存在になることをアピールし、王族同士の繋がりを重視した[28]。スパルタの外交を一手に引き受け、プトレマイオス 2 世との間に専制君主同士としての関係を構築したのである

3 つ目の碑文は、デルポイがアレウスとその子孫にプロクセニアやプロマンテイア（神

---

[24] Cartledge & Spawforth (1989), op. cit., p. 35; Palagia (2006), op. cit., p. 206.

[25] Pagkalos (2015), op. cit., p. 152.

[26] Cf. Kennell (2010), op. cit., p. 162; Cartledge & Spawforth (1989), op. cit., p. 36; Millender (2018), op. cit., p. 473.

[27] O'Neil, J. L. (2008), "A Re-Examination of the Chremonidean War," in McKechnie, P. and P. Guillaume (eds.), *Ptolemy II Philadelphus and His World*, Leiden & Boston, p. 67. 上に挙げたクレモニデスの決議碑文からは、アテナイとスパルタの同盟が締結される前に両国はプトレマイオス 2 世と同盟を結んでいたことがわかる。*IG* II^3. 1. 912, ll. 16–18, 33–34.

[28] Paschidis, P. (2008), *Between City and King: Prosopographical Studies on the Intermediaries between the Cities of the Greek Mainland and the Aegean and the Royal Courts in the Hellenistic Period (322–190 BC)*, Athens and Paris, p. 258; Kralli, I. (2017), *The Hellenistic Peloponnese: Interstate Relations: A Narrative and Analystic History, from the Fourth Century to 146 B.C.*, Swansea, p. 147, n. 51.

託優先権）などの特権を与えたことを刻んだ碑文である（*FD*. III 4. 418, *Syll*³. 430）。この「アレウス」はアレウス 1 世を指すのではなく、彼の孫で生後すぐに王位に就き 8 歳にして夭折したアレウス 2 世であると考えられている[29]。しかしながら、このアレウス 2 世の顕彰にもその祖父の影響がうかがえる。なぜなら、特権を与えられているのは「アレウス」のみであることから、「アレウス」とデルポイとの間の特別な関係を想定できるが、夭折したアレウス 2 世がそのような関係をデルポイと結ぶことができた可能性はないからである。一方、アレウス 1 世は 281 年にデルポイのアポロンの聖域をアイトリア人から守るという名目で、ギリシアの連合軍を率いてアイトリア連邦と戦争をしている[30]。この時にできた繋がりが、もう一人の王を差し置いて幼年のアレウス 2 世のみがデルポイからの特権を得られた所以であったと考えられる。

以上で見てきたとおり、4 世紀から 3 世紀を通じてスパルタに存在した最大のスタシスは、貧富の格差に起因するものではなく、富裕層と王との権力争いであった。アレウスの改革を受けてヘレニズム的な単独支配体制の確立を目指した次の王は、アギアダイのレオニダス 2 世であった。

レオニダスは上述のクレオニュモスの息子であり、生後間もなく即位したアレウス 2 世の後見人となり、その死後高齢ながらも王位に就いた人物である。後見人となる前に、彼は長い間セレウコス朝に仕えていた[31]。スパルタに帰った後、レオニダスは「公然と父祖伝来の慣習を変更」し、ペルシア風の「尊大さ」を「ギリシアの政治および法的な支配に不調和にも持ち込んだ」ため、市民とうまくいっていなかった[32]。つまり、彼は自分の父から王位を奪ったアレウスと、妻を奪ったアクロタトスの行った政策を引継ぎ[33]、ヘレニズム的単独支配体制確立を目指し、富裕エリート層との関係が悪化していたのである。しかし、レオニダスは軍事的才覚に恵まれず、スパルタ王が富裕エリート層を凌ぐ権威を得られる唯一の方法である軍事的成功とは無縁であったため、単独支配体制を確立するには求心力があまりに乏しかった。そこに現れたのが、20 歳の若さでエウリュポン家の王となったアギスであった。

20 歳の若さで王位に就いたアギスは異国の統治体制をスパルタに持ち込もうとしていたレオニダスに対抗してスパルタ古来の国制を回復することを宣言し、借金の帳消し

---

[29] 古くは、Bourguet, É. (1911), “Monuments et insciptions de Delphes,” *BCH*, 35, p. 448 や Pomtow による *Syll*³. 430 の解題に見られるように、「アレウス」はアレウス 1 世に同定されてきた。しかし、Tarn W. W. (1969), *Antigonos Gonatas*, Oxford, rep., first published 1913, pp. 304–305, n. 84 による適切な批判により、碑文で言及されているのはアレウス 2 世であるとせざるを得ないと筆者は考える。Cartledge & Spawforth (1989), op. cit., p. 239, n. 22 も見よ。

[30] Just. *Epit*. 24. 1. Kralli (2017), op. cit., pp. 117–121.

[31] Plut. *Agis*. 3. 6.

[32] Plut. *Agis*. 3. 6.

[33] Phylarchus. *FGrH* 81F44 = Athen. 141f–142f に、アレウスとアクロタトスの時代に、ペルシアの宮廷をまねた贅沢な共同食事がスパルタに導入された、という一節がある。そこから、アクロタトスもアレウスの政策を一部引き継いでいたと考えられる。

と土地の再分配を行うことで貧困層と非スパルタ市民の支持を得て富裕エリート層のパトロネジを奪い、彼らを上回る影響力を獲得しようとした。アレウスが単独支配体制の確立を目指す改革を行った時から必然であった、2 人の王によるたったひとつの専制君主の座を掛けた争いが始まったのである。セレウコス朝のもとで学んだ慣習や統治方法をスパルタに導入しようとするレオニダスに対抗しようとしたということこそが、アギスがリュクルゴスの国制への回帰を主張した所以であった。

リュクルゴスの国制への回帰という大義名分は、アギスを縛る足枷にもなっていた。そのせいで、スパルタにおける政治的なシステムを踏襲した形でしか改革を進めることができなかったためである。例えば、スパルタではエフォロイに法案提出の権限があり、長老会に法案に対する拒否権が認められていた[34]。そのため富裕エリート層の牙城となっていたエフォロイと長老会の協力が必要だったのである。

一方でアギスは富裕エリート層の勢力基盤であったパトロネジの解体を目論んだ。彼はまず、貧困層を富裕エリート層の影響下から解放するため借金の帳消しを実現した。さらにラコニアの中心部の土地を 4,500 人に分配して、スパルタの課題であった市民数不足を解決する計画を立てたが、分配の対象となる土地は当時全て富裕層の手中に収まっていた γῆ であった[35]。彼の真の目的は、富裕エリート層の影響力を殺ぎ、自らのパトロネジを貧困層と新市民で強化して単独支配体制を確立させるというものであった。

エリート層のオイコスの生まれではあるが、財産的には（貧困層とは言えないまでも）富裕層の中で下位に位置し、パトロネジを維持していくための資金に窮している一部の富裕エリート層もアギスの計画に賛同した[36]。彼らは自らの影響力が風前の灯火であることを知っていたため、アギスに賛同して改革を成功させ、新たなスパルタ社会を築くに至らずとも、借金の帳消しは実現させることによって復権を期した。彼らのような一部のエリート層がアギスの味方に付いた。

しかしながら、アギスは自らの支持基盤を完全に固めきるには至らなかった。一度は改革賛成派のリュサンドロスをエフォロイにすることに成功したものの、彼の後任のエフォロイは改革反対派だった。さらに、アギスが遠征のためスパルタを離れた際に反対派がレオニダスを擁して蜂起し、アギスを捕らえて処刑したことにより、アギスの改革は失敗に終わった。これは、富裕エリート層のパトロネジがいまだに強力であったこと、そして貧困層の中にもあまりに急進的なアギスの改革、特に非スパルタ市民への土地の分配に危機感を持つ者がいたということの証左である。

以上のように、アギスの改革の発端は貧困層と富裕層の対立ではなく、アギスとレオニダスによるヘレニズム的な専制君主の座をめぐる争いであり、アギスの治世を通じて彼を支持したのは貧困層ではなく、パトロネジの維持に窮していた一部の富裕エリート層だった。アギスの改革の弱点は彼がリュクルゴスの国制を掲げたことにあった。そのためアギスの勢力が優勢になった時でもエフォロイや長老会の影響力を奪ったり、実質的な一人王政を打ち建てたりすることができなかった。それを行うのは次の改革者、ク

---

[34] Michell, M. (1952), *Sparta: τὸ κρυπτὸν τῆς πολιτείας τῶν Λακεδαιμονίων*, Cambridge, p. 128.
[35] Plut. *Agis*. 7. 5.
[36] Plut. *Agis*. 6. 2–3.

レオメネスである。

レオニダスが 235 年に死去し、20 代半ばであった息子のクレオメネスがその後を継いだ時、アギスの改革は全く廃れてしまっていた。「政治的な権力は全てエフォロイのものであった[37]」が、クレオメネスはこれまでに何の軍事的成功も収めていなかったため、彼らに対抗する術を持っていなかった。そこで、クレオメネスもレオニダスとアギスのように、単独支配体制の確立を志すことを決意したが、すぐに行動を起こすことはしなかった。

それから数年間、彼はアカイア連邦との戦争を優勢の内に主導した。それにより十分な求心力を得たと確信したクレオメネスは、数人の友人に、「エフォロイを排除して、市民に財産（κτήματα）を分け与え、平等になったスパルタを立ち上がらせギリシアの覇権へと導く」という計画を明かした[38]。クレオメネスが目指したのは、エフォロイと彼らを利用してスパルタの政治を縦にしている富裕エリート層を追放し、彼らの財産を貧困層、あるいは新たに市民に編入される者たちに分配して彼らからの支持を取り付け、アカイア連邦とのペロポネソスの覇権をかけた戦いを自分一人で主導することであった。

そして、自らの手の者にエフォロイを急襲させ、1 人は逃げ延びたが 4 人を殺害した。その翌日、クレオメネスは 80 人を指名して国外追放としたが、この 80 人もそのほとんどが富裕エリート層でクレオメネスの改革に賛同しなかった者たちである[39]。そして民会を招集し、市民の前でクーデターの弁解を行った。要約すると以下のような内容であった。エフォロイとは、もともと外征で忙しい王を補佐するための官職であったにもかかわらず、その職権濫用は目に余るものとなった。そこで自分がスパルタの最も立派で神聖な国制を復活させるために、止むを得ずエフォロイを殺害したのであるが、あのリュクルゴスですら改革のために武装した人々を使ったため、暴力を伴わずに国制を変更することが如何に困難であるか明らかである[40]。

つまり、クレオメネスが立法者リュクルゴスの名前を持ち出した最大の理由は、自身のエフォロイ殺害と 80 人にも及ぶスパルタ市民の追放を正当化するためだったのである[41]。そしてその「アリバイ作り」のために、アギスが行った伝統の創造を利用して、彼と同じく借金の帳消しを行い、アゴーゲーとシュシティアを復活させ、彼が達成し得なかった土地の再分配を敢行した。同時にこれらの変革はスパルタ市民軍の増強につながるため、ペロポネソスにおけるスパルタの覇権復活というクレオメネスの次なる目的にも合致するものだった。

さらに、クレオメネスは単独支配体制確立の仕上げとして、アルキダモス 5 世暗殺後に空位となっていたもう一人のスパルタ王に、自分の弟エウクレイダスを即位させた。加えて、クレオメネスは長老会の権限も縮小し、代わりに「パトロノモイ」という新し

---

37 Plut. *Cleom.* 3. 1.
38 Plut. *Cleom.* 7. 1.
39 Stewart (2018), op. cit., p. 393.
40 Plut. *Cleom.* 10.
41 Shimron (1972), op. cit., p. 38.

い役職を創設した[42]。王の権限に制限を加えるような役職を全て廃止、あるいは弱体化し、自らの思想に基づいた役職を新たに作ることで、クレオメネスは自身による単独支配体制を完全に確立した。

また、クレオメネスはアレウスに倣って硬貨を造幣したが[43]、国内の富裕エリート層はほとんど追放されていたために、このクレオメネスの硬貨は、アレウスのものとは違い、傭兵やヘレニズム諸王をそのメッセージの受け取り手として想定して作られた。その証拠に、クレオメネスは表面に鷲と雷電が刻まれた銅貨も造幣したが、それらはクレオメネス戦争中にスパルタに資金援助を行っていたプトレマイオス朝の硬貨の図像を取り入れたものだった[44]。このようにして内政・外交共に掌握し、自らの望むままに戦争を行えるようになったクレオメネスは、すぐさまアカイア連邦との戦争を再開した。

この時期、クレオメネスが「改革の輸出」、つまり借金の帳消しと土地の再分配を諸ポリスに波及させるというプロパガンダによって、ペロポネソスの貧困層を味方につけようと試みたとされている[45]。しかし、一次史料からはそのような実態は浮かび上がってこない。例えばアルゴスがスパルタの支配下に入ったのは、クレオメネスがネメア祭に乗じて夜間に奇襲をかけて城塞を攻略したからであった[46]。また、シキュオンやコリントスなどの親スパルタ派は、実際はアカイア連邦の政策に対しかねてより反感を抱いている人々であった[47]。よって、クレオメネスが自らの改革を宣伝して諸ポリスにアカイア同盟からの離反を呼び掛けたわけではないと考えられる[48]。クレオメネスの改革の目的は、スパルタにおける自身の単独支配体制の確立であり、借金の帳消しや土地の再分配はその途上で止むを得ず生じた副産物に過ぎないからである。ペロポネソスの大部分がクレオメネスに従ったのは、スパルタが戦争を優位に進めたことと、アラトスがマケドニアを頼ったことに対する反感があったためである。ペロポネソスにおける勢力のほとんどを失ったアカイア連邦は、224 年にマケドニアのドソンと同盟を組むことを正式に決定した。

---

[42] Paus. 2. 9. 1. 長老会は終身制から任期 1 年に変更されたと考えられている。Shimron (1972), op. cit., p. 39; Michalopoulos, M. (translated by M. Kavallieros and M. A. Niforos) (2016), *In the Name of Lykourgos: The Rise and Fall of the Spartan Revolutionary Movement (243–146 BC)*, South Yorkshire, English translation of *Εις το όνομα του Λυκούργου*, first published 2009, p. 195, n. 75; Stewart (2018), op. cit., p. 393. パトロノモイの実際の職務については Oliva (1971), pp. 245–246 を見よ。

[43] Grunauer-von Hoerschelmann (1978), op. cit., pp. 7–16, Tafel 2, Gruppe III.

[44] Ibid., Tafel 3, Gruppe IV, V.

[45] Forrest, W. G. (1968), *A History of Sparta 950–192 B.C.*, London, p. 147; Cartledge & Spawforth (1989), op. cit., p. 53; Stewart (2018), op. cit., p. 393. Oliva (1971), op. cit., pp. 248–250 は、アカイア連邦の富裕エリート層が改革の波及を恐れたとする。

[46] Plut. *Cleom.* 17. 4–5.

[47] コリントスとアカイア連邦の関係、そしてアラトスとアカイア連邦の政策に対するコリントス人たちの憤りについては、Dixon, M. D. (2014), *Late Classical and Early Hellenistic Corinth, 338–196 B.C.*, London & New York, pp. 143–167 を見よ。

[48] Shimron (1972), op. cit., p. 46. *Pace* Africa, T. W. (1961), *Phylarchus and the Spartan Revolution*, Berkeley, p. 26.

222 年にラコニアへの侵攻を開始したドソンをセラシアに迎え撃ったクレオメネスは敗北し、エジプトへと亡命した。ドソンはスパルタに入ると、エフォロイ制を復活させ、長老会の国制の中心機関としての権限を回復し、クレオメネスによって追放された人々をスパルタに戻した[49]。スパルタ王は数年の空位期間の後、クレオンブロトス 2 世の孫アゲシポリス 3 世と王族出身ではないリュクルゴスという人物がエフォロイによって王位に就けられた。このリュクルゴスが、他の王家に属する人々を差し置いて王になれたのは、エフォロイに 1 人 1 タラントンもの賄賂を渡したためであるとポリュビオスは記述している[50]。スパルタの政治は、再び富裕エリート層によって牛耳られることとなったのである。

以上、アギスとクレオメネスの改革を 4 世紀から 3 世紀半ばにかけてのスパルタの歴史の流れの中に位置づけ、彼らの改革は単独支配体制の確立とスパルタのペロポネソスにおける覇権復活こそが目的であり、貧困層からの無条件の支持を得られるものではなく、また他のポリスに「輸出」できるものでもなかったことを明らかにした。アギスとクレオメネスはそれぞれ全く別の理由でリュクルゴスの国制の回復を訴え、それ故両者にとって借金の帳消しと土地の再分配が持つ意味も、全く違うものであった。

前者は、セレウコス朝の下でヘレニズム的な統治体制や慣習を身に着けたレオニダスがそれをスパルタに持ち込もうとして人々からの反感を買っている中で王位に就き、彼に対抗してスパルタ古来の法や慣習（とアギスが考えたもの）を復活することを訴えて同僚の王と富裕エリート層を凌ぐ影響力を手に入れようとしたのであった。彼にとって借金の帳消しと土地の再分配は、富裕エリート層のパトロネジを奪い、自身による単独支配体制を築くために必要な措置であった。

後者は、思いのままに軍隊を動かして、自身の手でスパルタにペロポネソスの覇権を取り戻したいと考えていた。そのため、自分に味方しない富裕エリート層を根こそぎ排除し、王権の足枷になっていたエフォロイを廃止し長老会の機能も低下させるという、暴力を伴ったラディカルな改革を行った後、その弁明としてリュクルゴスを持ち出し、借金の帳消しと土地の再分配によりクーデターの首謀者から古き良き国制を回復した者へと変身しようとしたのである。

スパルタにおける一連の改革は、セラシアの戦いで終わったわけではない。第二次マケドニア戦争時のスパルタの支配者ナビスは、富裕者を追放し富を分配し、奴隷や傭兵に市民権を与えて軍隊を増強し、アカイア連邦やマケドニア、さらにはローマと戦ってスパルタの覇権復活を目指した。ナビスの改革までを含めて、富裕エリート層同士のスタシスという視点からの考察が行われる必要がある。また、ヘレニズム期には改革やクーデターが全ギリシア世界で頻発していた。ヘレニズム期ギリシア全体の社会経済状態や外交関係を概観した上で、その中にスパルタの諸改革を位置づける必要がある。

---

[49] 古山正人（1982）、「アギスとクレオメネスの改革――前三世紀後半のスパルタの諸階層と改革の結果――」、『史学雑誌』、91、1253–1267 頁。
[50] Polyb. 4. 35. 14.